りて、逆浪立あがりて其音雷の如く、聽人膽を冷し魂を消す、黑潮は海面に墨をすりし如く、幾百ともなく渦ばかり流るゝゆへ、見る者怪しく是をみず、目くるめかずといふ人なし、晴天にて日和よければ、海上穩かにして、右の早潮黑潮もみえず、是を見るほどの天氣なれば、決て船をつかはさず、故に見しと云人は稀なり、もし右の潮にあたれば、何國ともなく押し流がされて、再び歸る人なき故、是は語りも傳へず、遠くみて早潮ならんと察るのみなり、順風にて日和もよしといふ日にも、大浪船を打越す事は度々なり、

〔倭名類聚抄三水泉〕水波　釋名云、風吹水成波文曰漣、音連、波體轉相連及也、又波浪濤瀾漪字、知名奈三

泊漪　唐韻云、淺水貌也、白柏二音、文選師說、左々良奈三

〔類聚名義抄五水〕潺仕纏仕山二反ナカルヤリミツサヽラナミ　浪盧宕反ナミウカフウコカス又魯浪反、和ラウ、　波音皤和ハナミ

〔下學集上天地〕浪波ナミ二字義同

〔東雅二地輿〕波ナミ　揚水也、亦鳴水也、古語にナと云ひしに、擧揚の義あり、されば舊事紀、日本紀に、擧の字、讀てナといひけり、鳴るといひ、鳴くといふも、聲を擧るの義也、鳴水とは、その音あるに因れるなり、たとへば阿波國風土記に、奈汰云者、其浦波の音無止時、依而奈汰云といふ義の如し、地名に、鳴海、鳴渡などいふが如き、古語にナミといひ、ナタといふ事の如し、ナミと云ひしは、鳴海といふ語の如く、ナダと云ひしは、鳴渡といふ語に同じ、タといひ、トといふは井に轉音なり、浪讀む事また同じ、

〔倭訓栞前編十九奈〕なみ　波浪をいふは、鳴水の義なるべし、よてさわぐをなみといふ、靜かなるを波なしともいへり、おほなみを濤、こなみは淪也、

〔倭訓栞中編二十六米〕めなみおなみ　波のうつに、一たびは高く、一たびは卑し、よて男女を分てるなり、

〔南遊紀行〕諸州めぐり四紀伊〕和歌浦、中略〇俗說に此浦におなみ有て、めなみなし、故に片男波と云、此說非